

分野の境界を越えて 「新しい社会史」と近世イングランドにおける政治文化

著者	ジョン・ウォルタ, 後藤 はる美(訳)
著者別名	John WALTER
雑誌名	東洋大学人間科学総合研究所紀要
巻	22号別冊
ページ	5-23
発行年	2019-10
URL	http://id.nii.ac.jp/1060/00011421/

分野の境界を越えて —「新しい社会史」と近世イングランドにおける政治文化—

ジョン・ウォルタ* (後藤 はる美訳**)

1. 「新しい社会史」の誕生

1971年にエリック・ホブズボームは「社会史家になるには、よい時代だ」と表明することができた¹。「新しい社会史 New Social History」は国際的な運動で、共通の起源と着想をもったが、ローカルな屈インフレクション曲があった²。1950年代後半から1970年代半ばまでがこの分野の決定的な成長期であり、これは個々の歴史家や研究機関、知的影響についていえる。学術誌では、『過去と現在 Past & Present』が1952年に、『社会史雑誌 Journal of Social History』が1967年に創刊された。また、労働史研究協会が1958年に創設され、その影響力ある『紀要 Bulletin』が1960年に初めて現れた。1964年には「人口と社会構造史のためのケンブリッジ・グループ」が、1968年にはウォリック大学に社会史センターが設立された。講座では、1963年にロドニ・ヒルトンがバーミンガム大学の中世社会史教授に就任し、1967年にハロルド・パーキンがランカスタ大学においてイギリス初の社会史講座教授に就任した³。1965年には、のちに経済社会研究会議(ESRC)となる社会科学研究会議(SSRC)が設立され、社会史・経済史に対するしばしば大規模な研究助成を行うようになった。1976年の社会史研究会の誕生と、『社会史 Social History』および『ヒストリ・ワークショップ・ジャーナル History Workshop Journal』の創刊は、ともにこの分野の成熟を示した。この史学史的発展の目印となるのは、イギリスの大学における「経済史」部局の「経済および社会史」部局への改称である。この改称は、経済史分野内での社会史の台頭に寄与した重要な貢献をもちろん反映していた。この観点からいえば、R・H・トーニーほかの早熟な仕事——20世紀初頭の社会問題と社会政策への関心を原動力と

* イギリス・エセックス大学(名誉教授)

** 人間科学総合研究所研究員・東洋大学文学部

¹ E. J. Hobsbawm, 'From Social History to the History of Society', *Daedalus* 100 (1971), 20-45. 引用は43頁より。

² 社会史の定義に関する微妙な差異については、『社会史研究』創刊号を参照。*Journal of Social History* 1 (1967), 3-16. 初期のイギリスにおける議論は以下を参照。Harold Perkin, 'Social History', in *Approaches to History: A Symposium*, ed. H. R. P. Finberg (1953, rev. 1962), 51-82; Jeffrey N. Wasserstrom, 'New Ways in History', *History Workshop Journal* 64 (2007), 271-294.

³ Jim Obelkevich, 'New Developments in History in the 1950s and 1960s', *Contemporary British History* 14 (2000), 140-141.

していた——は、一般に受け入れられている「新しい社会史」誕生の日付をずっと先取りして、明確な論点を展開していた⁴。「新しい社会史」は、部分的には「新しい経済史」の計量経済史に対する反動であり、「新しい社会史」は、「新しい経済史」の未熟な研究者の手によって提示された社会的プロセスの「かみ砕ける」〔とされた〕データの複雑さと解釈の問題性を強調した。しかし、社会史はより以前の経済史の伝統とのかかわりを求め続けた。これがとくに当てはまるのは、イングランド地方史のレスター学派の先駆的研究である。彼らの歴史的な地 形、生態環境および地域社会の相関への注目は、フランスで次第に影響力を増していたアナール派の展開と並行していた⁵。

「新しい社会史」の明確な野心と研究対象は、ともにより広い社会の流れを反映していた。高等教育の拡大と、学生の社会的構成の変化（下層中産階級および労働者階級の増加）が、1960年代の新設大学学部における分野の境界の解体と相まって、歴史学の分野における主題の「民主化」ともいえる現象に貢献した⁶。同様に、この民主化は、1945年以降のより広い政治や社会の流れとの政治的な連帯を反映し、エリートから民衆へと焦点を移動させた。

これらの社会、教育、制度における発展の背後にある知的な影響は多方面にわたり⁷、分野の境界線がきれいに引かれることはもちろんない。しかし、「新しい社会史」の登場は、歴史学と社会科学のあいだの学際性の利点の認識にあった。このことは、様々な分野における同時代的な展開を反映した一連の史学史的表明——おそらくは、マニフェストともいうべきもの——によって告知された。E・H・カーが1961年の講演シリーズで「歴史が社会学的になればなるほど、社会学が歴史的になればなるほど、双方にとって好都合である」と述べたことは有名である⁸。1963年に雑誌『過去と現在』は、学問的関心と手法において今や顕著な重なりがあるという文脈で、歴史学・社会学・社会人類学の分野の関係性を考察する学会を開催した⁹。同じ年に、キース・トマスの先駆的研究「歴史学

⁴ たとえば以下を参照。E. M. Leonard, *The Early History of English Poor Relief* (Cambridge, 1900); Alice Clark, *The Working Life of Women in the Seventeenth Century* (1919). そしてもちろん、R. H. Tawney, *Religion and the Rise of Capitalism: A Historical Study* (1926) [R・H・トーニー、出口勇蔵、越智武臣訳『宗教と資本主義の興隆——歴史的研究 上・下』(岩波文庫) 岩波書店、1956~1959年].

⁵ レスター学派については、Mike Thompson, Pam Fisher, Alan Fox and Christopher Dyer, *English Local History at Leicester: A Bibliography and History, 1999-2008* (Leicester, 2009): www.le.ac.uk/el/documents/Bibliography_1999_2008.pdf. アナール派の影響については、Maurice Aymard, 'The Annales and French Historiography (1929-1972)', *Journal of European Economic History* 1 (1972), 491-511; 'The Impact of the Annales School on the Social Sciences', *Review* 1 (1978); Stuart Clark, 'The Annales Historians', in Quentin Skinner, ed., *The Return of Grand Theory in the Human Sciences* (Cambridge, 1985), 177-198 [スチュアート・クラーク「アナール派の歴史家たち」クエンティン・スキナー編、加藤尚武他訳『グランドセオリーの復権——現代の人間科学』産業図書、1988年所収]; Lynn Hunt, 'French History in the Last Twenty Years: The Rise and Fall of the Annales Paradigm', *Journal of Contemporary History* 21 (1986), 209-224; Peter Burke, *The French Historical Revolution: The Annales School, 1929-1989* (Cambridge, 1990) [ピーター・バーク、大津真作訳『フランス歴史学革命 アナール学派 1929-89年』(岩波モダンクラシックス) 岩波書店、2005年].

⁶ Peter Burke, *History and Social Theory* (2nd ed., Cambridge, 2005) [ピーター・バーク、佐藤公彦訳『歴史学と社会理論』慶應義塾大学出版会、2009年] は、彼自身の学際研究の経験を論じている。これは、彼が1960年代にサセックス大学で歴史家として「社会構造と社会変化」についての講義を担当していたときのことである。次の彼の自伝的論文も参照。'Invitation to Historians: An intellectual Self-Portrait, or the History of an Historian', *Rethinking History* 13 (2009), 269-281.

と人類学」が発表された¹⁰。1966年には、『タイムズ文芸付録 *TLS*』が「歴史学の新しい方法」を唱える一連の論文を掲載した。よく知られたことに、トマスは同特集への寄稿論文「道具と仕事」において、「もし歴史学の任務が、過去の社会・文化システムの再構築であるのなら、人類学者と社会学者によって開拓された概念的な手段は、役立つどころか必須である」と論じた¹¹。

これらの学際的な交流の中心にあったのは、様々な社会の形成・再形成・変容にかかわるプロセスを分析するにあたって、社会学と歴史学が共通の課題を共有するという認識であった。歴史研究者も社会学者も、社会変容の理由を説明することを望んでいた。社会変容の「構造化の諸問題 the problematic of structuring」解明に対する歴史学者と社会学者の共通関心は、フィリップ・アブラムズによって明快にとらえられている。

両者〔歴史学者と社会学者〕は、人間の行為主体性の謎を理解しようとし、両者はともにそれを社会構造化のプロセスにおいて理解しようとしている。両者は、そのプロセスを時系列的に考えようとする…社会学は、結果として起こることを扱わねばならない。なぜなら、構造化はそのようにして生じるからだ。歴史学は理論的でなければならない。なぜなら、構造化はそのように把握されるからだ¹²。

さらに歴史学は、(多くが歴史的な深みが著しく浅い研究を行っている)社会学者に対し、社会変容の歴史のより長期的な視角を提供できる。その結果、社会学研究はアブラムズが言う「構造化の(歴史的)プロセス」の研究に取り組んだ(あるいは、取り組むべきだ)というのだ¹³。

この共通の焦点は、変化の原因を抽出し強調する試みの一環として、社会学モデルと「理念型」の幅広い支持をうながした¹⁴。最も初期において社会史は比較史であり、後の時代の産業化社会だけでなく、植民地社会や過去の小農社会との比較を用いた。近世イングランドにおける都市と農村の配分

⁷ 社会史の展開については下記の多様な論考を参照。Harold Perkin, 'Social History,' in *Approaches to History: A Symposium*, ed. H. P. R. Finberg (Toronto, 1962), 51-82; E. J. Hobsbawm, 'From Social History to the History of Society,' *Daedalus* 100 (1971): 20-45; Jim Obelkevich, 'New Developments in History in the 1950s and 1960s,' *Contemporary British History* 14 (2000): 125-142; Jeffrey N. Wasserstrom, 'New Ways in History, 1966-2006,' *History Workshop Journal* 64 (2007): 271-294; Adrian Wilson, 'A Critical Portrait of Social History,' *Rethinking Social History: English Society 1570-1920 and Its Interpretation*, ed. Wilson (Manchester, 1993), 9-58; Steve Hindle, Alexandra Shepard, and John Walter, 'The Making and Remaking of Early Modern English Social History,' in Hindle, Shepard, and Walter, eds., *Remaking English Society: Social Relations and Social Change in Early Modern England* (Woodbridge, 2013). 「新しい社会史」の課題については、Burke, *Sociology and History* (London, 1980) [ピーター・バーク、森岡敬一郎訳『社会学と歴史学』慶應通信、1986年]; *ibid*, *History and Social Theory*; また、以下の論集に所収の論考も参照。Anna Green and Kathleen Troup, eds., *The Houses of History: A Critical Reader in Twentieth-Century History and Theory* (Manchester, 1999).

⁸ E. H. Carr, *What Is History?* (Harmondsworth, 1961), 84 [E・H・カー、清水幾太郎訳『歴史とは何か』(岩波新書)岩波書店、1962年、95頁]。

⁹ 'History, Sociology and Social Anthropology: Conference Report', *P&P* 27 (1964), 102-109.

¹⁰ Keith Thomas, 'History and Anthropology', *P&P* 24 (1963), 3-24.

¹¹ Keith Thomas, 'The Tools and the Job', *TLS* (7 April, 1966).

¹² Philip Abrams, *Historical Sociology* (Shepton Mallet, 1982), ix-x. Cf. Christopher Lloyd, *Explanation in Social History* (Oxford, 1986).

¹³ Abrams, *Historical Sociology*, 304.

を考慮して「農村のほうはずっと多いため」、「新しい社会史」は、社会科学における小農や地方の農村社会、とりわけ古典的な共同体研究——これらは近世社会史研究に大きな影響を与えたが、現在は十分に認識されていない——の仕事から多くを摂取した¹⁵。

この「大きな構造と大きなプロセス」における諸問題の共有には、産業革命によって代表される主要な変化の諸結果を説明し、図示するという挑戦が大きく関係していた¹⁶。この課題は、おのずから近代化論と絡みあい、社会史全般、とりわけ近世社会史の台頭に深い意味合いをもった。最悪の場合、近代化論は変化を一連の急激な非連続としてとらえる「鏡」の歴史像を生み出した。産業化以前の社会は、一連の否定によって理解された——「前工業化」「前近代」「前階級社会」「前政治社会」というように¹⁷。

近代化論の特別な一種であり、社会科学の初期の課題の多くを支配していたマルクス主義は、イギリスの社会史家にとってとりわけ魅力的なものとなった。政治に肩入れしたマルクス主義から慎重に距離をおいた者でさえ「低俗なマルクス主義」を用いた——すなわち、唯物論的分析を適用し、歴史的变化における原因の役割のより多くを経済的・社会的なるものに見出し、人間の行為主体性（あるいはその不在）を主に階級形成の文脈において説明しようとした。したがって、この「ソフトな」類いの史的唯物論にとってさえ、「現実主義的」社会史の顕著なイデオロムとして現れた「階級」という普遍化のカテゴリが前提となっていた。しかしこれは、言語論的転回が階級の「現実」に疑問を呈し、「新しい文化史」が登場してアイデンティティを（とりわけジェンダーに関して）複数化するにつれ、疑わしいものとなった。

そうはいつても、「社会史のパラダイム」の大部分は「中間理論」ともいえる、実り多い借用によって象徴された。これは台頭しつつあるイギリスの社会史についてよく当てはまった。社会理論そのものを応用するというよりは、ジェフ・エレイの言う「社会科学的テクニック」を吸収することに居心地よさを見出し（そして確かにより成功し）、折衷主義が（少なくとも歴史家たちには）美德とみなされたのだ¹⁸。

過去の世界の唯物的で因果的な分析を行う「新しい社会史」の中心は、自らをマルクス主義者とみなした歴史家によって実践された「下からの歴史」として知られる潮流の誕生と直に関係している。

¹⁴ 以下を参照。Theda Skocpol, 'Sociology's Historical Imagination', in Theda Skocpol, ed., *Vision and Method in Historical Sociology* (Cambridge, 1984), 1-21 [T・スコチポル編、小田中直樹訳『歴史社会学の構想と戦略』木鐸社、1995年]。

¹⁵ Ronald Frankenberg, *Communities in Britain: Social Life in Town and Country* (Harmondworth, 1969)。

¹⁶ 引用は、下記。Charles Tilly, *Big Structures, Large Processes, Huge Questions* (New York, 1984)。

¹⁷ しかし、一般的な合意の内には相当の差異がある。一部は、学際性は、社会学による社会変化についてのしばしば歴史的理解の浅い理論化に対する歴史家の批判を促進し、歴史家による歴史的に豊かな理解の開発をうながすべきだと論じた。批判的な意見については、以下を参照。Craig Calhoun, 'The Rise and Domestication of Historical Sociology', in Terrence J. MacDonald, ed., *The Historic Turn in the Human Sciences* (Ann Arbor, 1996), 305-337; Gareth Stedman Jones, 'The Poverty of Empiricism', in R. Blackburn, ed., *Ideology in Social Science*, ed. (1972), 96-115. HWJ のマニフェストに持ち込まれたこの挑戦は、以下に再録された。Raphael Samuel, ed., *History Workshop Collectanea 1967-1991* (Oxford, 1991)。

この言葉は明らかにE・P・トムソンの『タイムズ文芸付録』誌の「歴史学の新しい方法」特集への寄稿で初めて用いられたものだ¹⁹。しかし、「下からの歴史」はイギリス共産党の歴史家グループの活動により深く根差していた（その上層メンバーには、ホブズボーム、ロドニ・ヒルトン、ジョージ・リュース、クリストファ・ヒルが含まれた。全員が民衆運動に強い影響力を発揮するようになる歴史家たちである）²⁰。学界の外で歴史を書き、教えた者たちの貢献は、とりわけ労働者教育協会（WEA）（R・H・トーニーがその初期の主唱者であり、E・P・トムソンとレイモンド・ウィリアムズがおそらくその最も有名なメンバーである）の学外での活動²¹や、民衆の歴史と地方史のより古い伝統のなかに見出せる²²。その起源がどこにあったにせよ、「下からの歴史」は「新しい社会史」の大部分のかなめ石となった。その影響力は、社会史が根本的に「抵抗 oppositional」であるとの主張によって強調された——社会史は、抽象概念に対して「現実の生活」を扱い、特権階級ではなく「普通の人びと」と日常に注目した²³。そして、「労働史」の早熟な発展は、制度史やイデオロギーの歴史から、群衆や従属する者たちの経験と行為主体性や労働者文化の研究への転換を奨励した。このように、1960年代の「新しい社会史」は、ジェフ・エレイが「民衆と結びつき、社会科学から学んだ」と特徴づけたような二重の系譜をもっていた²⁴。

同様の議論は、人類学との交流によってもたらされうる利点についてもなされた。人類学者は歴史家に、「前工業化」社会の分析を容易にするかもしれない概念的な手段を提供した。人類学者にとって研究対象の他者性は空間と距離によって構築されるのに対して、歴史家の他者性は時間自体が距離となる「外国」としての過去という考えによって構築されたからである。歴史家が研究する社会の多くが小農を主体としているとしたら、人類学者は「現実の」小農に対するフィールドワークからの発見を提供することができるというのだった。キース・トマスが「歴史家が書物で読むしかない事柄に関する直接的な体験」と特徴づけたものだ²⁵。彼が社会学と人類学の同起源のディシプリンと呼ぶものと歴史学との関係についてのトマスによる極めて有力な初期の計画的な発言は、学際的な展開へとつ

¹⁸ Geoff Eley, *A Crooked Line: From Cultural History to the History of Society* (Ann Arbor, 2005), 40. Adrian Wilson, 'A Critical Portrait of Social History', in Adrian Wilson, ed., *Rethinking Social History: English Society 1570-1920 and Its Interpretation* (Manchester, 1993), 15-20. 「1980年代の人類学と歴史学」についての議論は、以下を参照。Theodore K. Rabb and Robert I. Rotberg, eds., *The New History: The 1980s and Beyond* (Princeton, 1982), 227-278; Thomas, 'History and Anthropology'. より批判的な、しかしそれでも共感的な反応としては、E. P. Thompson, 'Anthropology and the Discipline of Historical Context', *Midland History* 1 (1972), 41-55; idem, *Folklore, Anthropology, and Social History* (Studies in Labour History Pamphlet, 1979), Bernard S. Cohn, 'Anthropology and History in the 1980s', in Rabb and Rotberg, eds., *The New History*, 227-252; idem, 'History and Anthropology: the State of Play', in his *An Anthropologist among the Historians: A Field Study* (Delhi, 1990).

¹⁹ E. P. Thompson, 'History from Below', *TLS* (7 April 1966).

²⁰ Harvey J. Kaye, *The British Marxist Historians: An Introductory Analysis* (Cambridge, 1984).

²¹ [J. R. Williams, R. M. Titmuss, F. J. Fisher], *R. H. Tawney: A Portrait by Several Hands* (1960).

²² Raphael Samuel, 'British Marxist Historians, 1880-1980: Part One', *New Left Review* 120 (1980), 21-96.

²³ Raphael Samuel, 'What is Social History?', *History Today* (March 1985), 34. ヒストリー・ワークショップの展開については、Samuel, *History Workshop Collectanea*.

²⁴ Eley, *A Crooked Line*, 47.

なかつた。小さな隔絶した共同体についての人類学は、さもなくば歴史分析のほとんどにおいて取り残される領域や過去の社会における、従属する集団の生きられた経験のなかにある相関性を研究することを可能にした²⁶。

人類学——とくに歴史家の関心を最初に集めたイギリスの社会人類学——は、家族、親族、共同体、あるいはジェンダーが分析の中心のカテゴリを成した広範な社会形態に関する詳細な研究だけでなく、これらの社会形態のあいだの相互関係に関して——おそらくは、その「機能主義」において過度に成功裏に——社会がいかに構築され、再生産されたかを説明する全体論的な議論を提供した。さらに、人類学の文化相対主義の重視——信念と行動のあいだの関係性の分析において最も明らかである——は、社会史家が、さもなくば歴史家の「見下し」になりかねないものから過去を救い出すことを助けた。これは、魔女と「民間信仰」の研究のなかで直ちに実現された。これらの研究は、近世のプロテスタントおよびカトリック改革者と前世代の歴史家の双方が継承した偏見を通じて、過去の精神世界（心^{マンダリテ}性）のロジックを明らかにしたのである。

社会科学への転回は、過去の社会を分析するのに必要な概念を歴史家たちに提供しただけでなく、歴史家の正当な領域内に位置づけられる論点の範囲をも拡張した。「よい歴史家は、伝説の食人鬼に似ている。人の肉を嗅ぎつけるところに獲物があると知っているのである」とのマルク・ブロックの名言にしたがって、社会史家は拡大し続ける主題に取り組み始めた。それにはたとえば、歴史的共同体研究、家族史、職業と共同体の歴史、犯罪と逸脱行為の歴史、社会運動と抵抗の歴史、民衆文化の歴史、宗教社会学、そして少し遅れて、ジェンダーや身体と性の歴史が含まれた²⁷。この主題の増大は、キース・ライトソンが「私たちのあらゆる行為についての系譜」と呼ぶものを回復しようとする「新しい社会史」の野心を反映していた²⁸。

社会史家は、自らを「政治の」「経済の」といった単にもう一つの「形容詞の歴史 *adjectival history*」の実践者とみなしてはいなかった。ピーター・バークにとって社会史は、社会関係の、社会構造の、社会的結束や社会闘争の、社会階級と社会集団の、日常生活と私生活の歴史以下のものでは決してなかった²⁹。キース・ライトソンにとって、社会史は「多様な視角をもとに、社会的、文化的、経済的、制度的構造が生じ、維持され、時間の経過にしたがって変化する様を、適切に文脈化して理

²⁵ Thomas, 'History and Anthropology', 8. これはもちろん人類学者が彼らの実践における詩学と政治学の批判を始める前の無邪気な時代のことである。James Clifford and George E. Marcus, *Writing Culture: The Poetics and Politics of Ethnography* (Berkeley, 1986) [ジェイムズ・クリフォード、ジョージ・マーカス編、春日直樹ほか訳『文化を書く』紀伊國屋書店、1996年]。

²⁶ Keith Thomas, 'History and Anthropology', *P&P* 24 (1963), 3-24; Thomas, 'The Tools and the Job,' *TLS*, April 7, 1966; Interview with Keith Thomas in Maria Lúcia G. Pallares-Burke, *The New History: Confessions and Conversations* (Cambridge, 2002), 90-91.

²⁷ Marc Bloch, *The Historian's Craft: Reflections on The Nature and Uses of History and the Techniques and Methods of Those Who Write It* (Manchester, 1992 edn), 22 [マルク・ブロック、松本剛訳『歴史のための弁明——歴史家の仕事』岩波書店、2004年、6頁]。

²⁸ Keith Wrightson, 'The Enclosure of English Social History', in Wilson, ed., *Rethinking Social History*, 60.

²⁹ Burke, *Sociology and History*, 31.

解する説明を生み出す試み」であった³⁰。社会史は、もう一つのサブ・ディシプリンではなく、「全体論的歴史 *totalising historiography*」であった³¹。その野心は、それ自体が歴史分析の他のすべての領域のバックボーンとなる、社会についての歴史 (*societal history*) を書くことであった。従来の（「政治が取り残された」）「残余の」社会史に代わって、「新しい社会史」は、過去についての研究の脊椎を成した。

社会史家は、このように、社会としての社会の歴史を書くことをめざした。近世社会のあらゆる集団についての社会構造、社会関係や社会経験が、近世イングランドの「新しい社会史」の中心に置かれた。英語圏における社会史の時系列的な発展は、産業革命の原因と結果への初期の取り組みによって支配された「新しい社会史」とともにあった。この性質が意味したのは、近世の社会史家が着想を求める際には、他分野だけでなくまずその後の時代に、またイングランドから外側に向かって目を向けざるをえないことであった。「長い18世紀（とそれ以降の）研究」と認識されることになる、社会史のより初期の展開のなかで、研究者はホブズボーム、トムソンおよび彼らの同僚や弟子たちの仕事によって明らかにされた、より後の時代の、おおむね「疑似マルクス主義的 *marxisant*」な社会史に目をやることとなった³²。これは、草創期の近世の社会史の課題が、その前後の時代を扱う一群の研究によって規定されることを意味した。この一群の成果のかなりの影響力にもかかわらず、近世社会史家は彼ら自身の目的論的危機に直面した。近代社会の起源——ウェーバーに影響を受けた研究の初期の実践者であるハロルド・パーキンの著作名でもある——に関する「新しい社会史」の関心のなかで、近世社会史はより長い時代区分のなかに織り込まれていった。この動きは、近代化論だけでなく、当時、盛んだった「封建制から資本主義への移行」論争の影響を示すものである³³。その結果、近世社会史はそれ自身の修正主義のモメントにとらわれることとなった。そのなかで、新たな研究が生み出され、さきの「鏡」の歴史による否定のいくつかに疑問を呈すことになる。鍵となる著作は、キース・ライトソンの1982年の著作、『イングランド社会史』である³⁴。

2. 時間のなかで私たち自身を理解する

——K・ライトソンの『イングランド社会史』と新しい近世社会史

新しい近世社会史の直接的な系譜は、クリストファ・ヒルとピーター・ラスレットの研究からの影

³⁰ Wrightson, 'Enclosure', 73.

³¹ Wilson, 'Critical Portrait', 20-24.

³² Rodney Hilton, *The English Peasantry in the Later Middle Ages* (Oxford, 1975); *Rodney Hilton's Middle Ages: An Exploration of Historical Themes*, ed. Christopher Dyer, Peter Coss, and Chris Wickham, *Past and Present* supplements, n.s., vol.2 (Oxford, 2007); George Caspar Homans, *English Villagers of the Thirteenth Century* (Cambridge, Mass., 1941). この影響については、Keith Wrightson, 'Medieval Villagers in Perspective', *Peasant Studies* 7, no.4 (1978), 203-217.

³³ R. J. Holton, *The Transition from Feudalism to Capitalism* (Basingstoke, 1985); Harold Perkin, *The Origins of Modern English Society 1780-1880* (London, 1969).

³⁴ Keith Wrightson, *English Society 1580-1680* (London, 1982) [キース・ライトソン、中野忠訳『イギリス社会史 1580～1680』リポート、1991年].

響のなかに見出すことができる。生前のこの二人の歴史家を分かった意見の相違を思えば、彼らの最も影響力をもった二著作——ヒルの『革命前夜のイングランドにおける社会とピューリタニズム』（1966年）と、ラスレットの『われら失いし世界』（1965年）——が、合わせて近世社会史の基礎文献とみなされるのは皮肉かもしれない。ヒルの著作——労働者教育協会で彼が行った教育の成果である——は、宗教社会学の実践であり、「イングランド社会のピューリタニズムのルーツ」の考察をめざしていた³⁵。同書は、ピューリタニズムを教会から取り出し、社会のなかに位置づけ、「ピューリタンを支持した、あるいはピューリタンになった非神学的な理由」を明らかにしようとした。この点が示唆するように、ヒルの仕事はR・H・トーニーの『宗教と資本主義の興隆』——ヒルのPhD生であったキース・トマスも、歴史家としての彼の思想への「深い影響」を認めている書物である——を継承している³⁶。また、トーニーの後方で、ヒルの一連の論考は、最初の歴史社会学者ともいえる理論家マックス・ウェーバーの研究の影響を受けている。『革命前夜のイングランドにおける社会とピューリタニズム』の脚注にはウェーバーもトーニーもさほど現れないが、彼らの考え方が、事実上、イングランド地方社会の歴史社会学の初期の論考ともいえる同研究を構築しているのである。「勤勉な類いの人びと industrious sort of people」——ライトソンがのちに「中流の人びと」と呼ぶことになる農場経営者と富裕な職人——に対するピューリタニズムの魅力の考察をつうじて、ヒルの一連の論考は近世イングランド社会の「新しい社会史」にとって決定的となる様々な問題を考察した。たとえば、民衆宗教の社会的外形や、宗教的言説と世帯および共同体における社会関係の構造の関係、教区における貧民の位置づけが、その例である。「ライトソンの主題」として知られるようになるこれらのテーマの中心性は、直ちに明らかになるだろう³⁷。

ピーター・ラスレットの『われら失いし世界』は、イングランドの前工業化社会の礎石の分析を歴史社会学の文脈のなかで明示的に組み立てた（そして、のちに「社会構造的時間」という概念を展開した）³⁸。ライトソンはラスレットに倣い、マルクスよりウェーバーを利用した。ウェーバーの著作は近世社会の特徴や特殊性を分析するのに適合すると思われたからである。さらに重要だったのは、ラスレットも創設メンバーの一人である「人口と社会構造史に関するケンブリッジ・グループ」によって実践された歴史人口学の影響である。ケンブリッジ・グループの重要性は、評価しすぎることではない。同グループは「新しい社会史」の初期の提唱者たちが思い描いた共同研究ユニットの一種として際立っており、学際的な研究の実践例と、領域横断的で文化横断的な交流の出会いの場を提供

³⁵ Christopher Hill, *Society and Puritanism in Pre-Revolutionary England* (1964), 9.

³⁶ A・マクファーレンによるK・トマスのインタビュー（2009年）www.sms.cam.ac.uk/media/1132829.

³⁷ しかし、ヒルの影響はさらに大きかった。彼の『宗教改革から産業革命へ』（1967年）は、農業・商業資本主義の受益者（ヨーマンと商人）と、その犠牲者（職人と労働貧民）のあいだの社会的分化について論じている。この議論はより慎重に考察されて、ライトソンの『イングランド社会史』で論じられる社会変化の理解にとって決定的なものとなっている。britishscholar.org/publications/2011/08/15/august-2011-keithwrightson.

³⁸ たとえば、以下の論集を参照。Peter Laslett, *Family Life and Illicit Love in Earlier Generations: Essays in Historical Sociology* (Cambridge, 1977).

した³⁹。

ケンブリッジ・グループの成果は、近世イングランド社会史を徐々に脱神話化していった。リグリーとスコフィールドは、16～17世紀のイングランドの男女がずっと遅く結婚し、より小さな世帯で暮らす傾向にあり、徒弟奉公や雇用、求婚と結婚のために、かつて考えられていたよりもずっと頻繁に移住することを示した。これらの社会構造の特徴に関する骨の折れる復元は、教区簿冊や「センサス型住民書上」に基づいており、ラスレットによれば、「私たちが時間のなかで理解する」プロジェクトの基礎となるものであった。そしてそのようなものとして、持続的な構造と社会変化のプロセスの複雑な相互関係に関するライトソンの分析を特徴づけるものとなった。

ケンブリッジ・グループは、フランスのアナール派と連携する方法、概念および個々人との最初の出会いを提供するフォーラムでもあった。アナール派の仕事はとりわけ重要性をもつようになった——それは、とくにピエール・グベールの仕事に代表されるアナール派第二世代と呼ばれる動きの一部を成した地域研究において最も明らかである⁴⁰。アナール派は世紀前半のフランス学界における政治史と外交史の優位に対する反動にその起源をもっており、彼らにとっては、重大な変化は生態環境や経済、社会構造の変化のなかにあった。彼らによれば、深層構造における変化が、出来事の表層的な歴史を制限し、決定したのだ。エリートの行動を第一の要因を動かす動因 (*primum mobile*) とみなす伝統的な政治史においては、この決定のヒエラルキーは認識されてこなかった⁴¹。生態環境から経済を通じて社会へ、さらに文化へと至る、アナール派第二世代が用いたヒエラルキーは、それ自体、学際的なモメントへの明確な反応を反映していた。この解釈は、定義上、当然ながら社会科学的で根本的に構造的な因果関係の分析をもたらした。そのライトソンへの影響は、『イングランド社会史』の章の順序に看取できる。(こののちには、起源を類似の学際性への参加にもつヨーロッパの他学派が近世イングランド社会史の発展に重要な役割を果たした。人類学の事例研究と社会的ドラマを利用したイタリアのミクロストリア (*microstoria*)⁴²、ドイツの日常生活史 (*alltagsgeschichte*) である)⁴³。

アラン・マクファーレンは、1972年にSSRCの助成による先駆的な共同研究プロジェクトを立ち上げた。彼は歴史家および人類学者として教育を受け、のち1975年と1977年にSSRC助成による二

³⁹ “‘The Family Way’: Interview with Peter Laslett”, *CAM* 59 (2000), 20.

⁴⁰ Pierre Goubert, *Beauvais et le Beauvaisis de 1600 à 1730* (Paris, 1960) [ピエール・グベール、遅塚忠躬／藤田苑子訳『歴史人口学序説——17・18世紀ボーヴェ地方の人口動態構造』岩波書店、1992年]；idem, *The French Peasantry in the Seventeenth Century* (Cambridge, 1986).

⁴¹ アナールとその影響については、上記脚注5を参照。

⁴² Giovanni Levi, ‘On Microhistory,’ in Peter Burke, ed., *New Perspectives on Historical Writing* (Cambridge, 1991), 93-113 [ジョヴァンニ・レーヴィ「ミクロストリア」ピーター・バーク編、谷川稔ほか訳『ニュー・ヒストリーの現在——歴史叙述の新しい展望』人文書院、1996年所収]；Edward Muir and Guido Ruggiero, eds., *Microhistory and the Lost Peoples of Europe: Selections from Quaderni Storici* (Baltimore and London, 1991)；Carlo Ginzburg, ‘Microhistory: Two or Three Things That I Know about It,’ *Critical Inquiry* 20 (1993), 10-35；Jacques Revel, ‘Microanalysis and the Construction of the Social,’ in Jacques Revel and Lynn Hunt, eds., *Histories: French Constructions of the Past* (New York, 1996), 492-502；John Brewer, ‘Microhistory and the Histories of Everyday Life,’ *Cultural and Social History* 7, no.1 (2010), 87-109.

つの重要なプロジェクトを実施した人物である。上記の企画は、当初は農村部の二教区——カンバーランド州のカービー・ロンズデイルと、エセックス州のアールズ・コーン——の歴史的共同体の共同研究として計画された。これは極めて野心的なプロジェクトで、教会、国家、荘園の史料を駆使して二つの共同体の長期持続 (*longue durée*) を体系的に再構築する試みであった。この計画は、境界をもつ社会的存在としての「共同体」の性質や、歴史的共同体研究を行うための方法論に関する重要な理論についての議論をうながした⁴⁴。中世および近世社会史における「共同体」の性質と重要性の重視は、社会科学の理論的研究に否応なく依拠しており、当時の社会科学では、特定の社会形成をその周囲に位置づけ、社会変化を評価するような連続体を構築するためのモデルや理念型が優位を保っていた⁴⁵。究極的には、アールズ・コーンという一つの村の公文書すべてを回復し、書き写すことで、マクファーレンのプロジェクトは体系的な連続史料調査や、複数のアーカイブ史料間のレコード・リンクエージの可能性を社会史家に示した⁴⁶。

ライトソンは、歴史学と社会科学のより親密な関係に向けたマニフェストにおいてキース・トマスが暗示した前提を共有していた。それは、社会学者は歴史上の変化の性質に関する根本的な問いを明らかにする概念やモデルを提供するかもしれないが、問いへの答えは、しばしば焦点を絞った実証的な歴史研究のなかにのみ見出せる、というものである。ライトソンは、マクファーレンの歴史的共同体研究からも大きな影響を受けていた。中間理論レベルにおいて最も影響力が高かったのは、1950～60年代に発達したイギリスの伝統的な実証社会学の実践者らによって設定された、より最近の課題であった。近世イングランドの農村社会とその他の農村社会の相似の認識は、SOAS (ロンドン大

⁴³ Alf Lütke, 'The Historiography of Everyday Life: The Personal and the Political,' in Raphael Samuel and Gareth Stedman Jones, eds., *Culture, Ideology and Politics* (London, 1982), 38-54; Geoff Eley, 'Labor History, Social History, *Alltagsgeschichte*: Experience, Culture, and the Politics of the Everyday—a New Direction for German Social History?', *Journal of Modern History* 61 (1989), 297-343; Lawrence Stone, 'The Revival of Narrative: Reflections on a New Old History,' *P&P* 85 (1979), 3-24; Sarah Maza, 'Stories in History: Cultural Narratives in Recent Works in European History,' *American Historical Review* 101, no.5 (1996), 1493-1515.

⁴⁴ Alan Macfarlane, 'History, Anthropology and the Study of Communities', *Social History* 2 (1977), 631-652; Craig J. Calhoun, 'History, Anthropology and the Study of Communities: Some Problems in Macfarlane's Proposals', *Social History* 3 (1978), 363-373; idem, 'Community: Towards a Variable Conceptualization for Comparative Research', *Social History* 5 (1980), 105-129. Alan Macfarlane, *Witchcraft in Tudor and Stuart England: A Regional and Comparative Study* (London, 1970); idem, 'Historical Anthropology', *Cambridge Anthropology* 3 (1977), 1-21. 2008年に録画されたマクファーレンのキャリアについての興味深いインタビューがある。www.youtube.com/watch?v=hIbv5BybJ また、Co. Macfarlaneのウェブサイトは、彼が歴史人類学において果たした役割に興味をもつ者にとって情報の宝庫である。www.alan-macfarlane.com/contents_web.html.

⁴⁵ Robert Redfield, *The Little Community: Viewpoints for the Study of the Human Whole* (Chicago, 1955); idem, *Peasant Society and Culture: An Anthropological Approach to Civilization* (Chicago, 1956) [レドフィールド、安藤慶一郎訳『文明の文化人類学——農村社会と文化』誠信書房、1960年]。

⁴⁶ Alan Macfarlane, in collaboration with Sarah Harrison and Charles Jardine, *Reconstructing Historical Communities* (Cambridge, 1977); *Earls Colne: Records of an English Village, 1375-1854*: www.dspace.ca.ac.uk/handle/1810/195838. カービー・ロンズデールについては、以下を参照。Alan Macfarlane, 'The Myth of the Peasantry: Family and Economy in a Northern Parish', in R. M. Smith, eds., *Land, Kinship and Life-Cycle* (Cambridge, 1984), 333-349.

学東洋アジア研究学院)における小農研究セミナーや、小農研究通信 (*Peasant Studies Newsletter*) とそれを継承した『小農研究雑誌 *Journal of Peasant Studies*』における重要な学術交流を導いた。こうした事例研究と実証社会学の取り組みは、次に、より前の世代の共同体研究を再発見した——それらは、シカゴ学派による都市社会学の先駆的影響力や、特定の共同体に関する同時代的な研究の詳細な読解にその系譜を辿ることができる共同体研究である⁴⁷。

比較的小さな共同体へと考察のスケールを狭めることで、入手できる史料の体系的な利用が促進された。また、社会人類学の影響を認めることで、歴史家は複数の物語のあいだの相互関係を詳細に探究し、それらの物語を語ることを奨励された。ライトソンは数を数えることを目的に、一群のアーカイヴ史料の体系的で連続的な調査を行った。しかし、彼にとって数量化は、当該史料の生成に関与し、発見された統計的パターンに意味を与えるような社会的・司法的プロセスへの感受性と一体のものであった。彼の研究手法は「小規模で、濃密な焦点をもつ、骨の折れるレコード・リンケージ」を中心としていた。これらの影響のすべては、エセックスの一教区を200年以上にわたって分析した、彼の正しく有名な共同研究『イングランドの一農村における貧困と信仰』にみることができる⁴⁸。農村社会の構造の地域的なパターンに関する生態環境を軸とした分析と、地形と集落の持続的な構造を、心性と信仰システムの結びつきに関連づけようとする試みは、アナール派の関心と呼応する。空間と場所の重要性に対するこの深い洞察は、地方史のレスター学派にも部分的に負っていた。

ライトソンの『イングランド社会史』は、「新しい社会史」の展開の第一段階における傑作の一つである。1982年に出版されたが、調査と執筆は1970年代後半に行われたものであり、同書は近世イングランド社会史の成熟を示している⁴⁹。この書物はイングランド社会史の教科書シリーズの一巻として依頼されたが、明快で大胆な議論と、分析における繊細さとニュアンスを合わせもつ多くの新しい解釈にあふれたもので、実際には教科書の域をはるかに超えていた。ウェーバー的な近世の社会構造の解釈を応用し、中級レベルの社会学的概念と理論に幅広く依拠し、彼自身や他の研究者によるアーカイヴ史料に基づく実証研究を総合することによって、ライトソンは解釈によって導かれた論考を提示したのだ。

時代を変化と連続によって読解するなかで、『イングランド社会史』は、イングランド社会に影響を与えた四つの主要な力を同定した。すなわち、人口学的、経済的な動向と、社会構造の変化が、四つ目の文化的変容——宗教改革の不均質なインパクトや、教育の拡大、識字率の上昇——を増進したというように。ライトソンは、これらの変化の諸力のあいだの相互関係を影響力のヒエラルキーとして跡づけ——このヒエラルキーの概念はアナール派にみられるそれと呼応する——、その成果は重大な社会的差異化のフィルターを通して読まれねばならないと述べた。同書は並外れて優れた成果で

⁴⁷ この概観は、以下を参照。Frankenberg, *Communities in Britain*.

⁴⁸ Keith Wrightson and David Levine, *Poverty and Piety in an English Village: Terling 1525-1700* (New York, 1979; 2nd ed. Oxford, 1995).

⁴⁹ Wrightson, *English Society 1580-1680*.

あったし、いまだにそうあり続けている。『イングランド社会史』は、出版以来、〔英語圏では〕一度も絶版となったことはなく、彼の指導下で博士論文を書く一群の学生たちを惹きつけてきた。そして次にはその学生たちが、近世社会史への重要な貢献を行ってきている⁵⁰。

3. 新しい政治史——政治の社会史

『イングランド社会史』の登場は、社会史の命運の転換点となった。新しいフィールドが開拓され、新しい専門誌が刊行された。しかし1990年までには、ライトソンはこの専門化の進行の結果、〔社会史の〕野心と成果が狭められてゆくことにすでに不安を抱いていた——彼が「イングランド社会史の囲い込み」と名づけた現象である⁵¹。これもまた、分野の成熟の意図せざる結果の一つであるだけではなかった。増加しつつある社会史家たち、とりわけ何が「政治的なもの」を構成するのかに関する同時代の社会理論（フェミニスト理論）のさらなる再考に影響を受けていた者たち——にとって、修正主義のもたらした問題と取組み合う政治史と彼らのあいだの関係は、意識的な分離に帰結した。ある社会史家たちにとっては、分離あるいは隔離が、彼らと近世政治史の関係を特徴づけるものであり続けたのである。

修正主義と「新しい社会史」と呼ばれたものは、並行する、しかし別個の運動であった。修正主義の生成にかかわる原理は、社会的なものの政治的な領域へのインパクトを否定することであり、この「科学的」で実証主義的なカテゴリ形成と理論実験の叢生期にあった修正主義は、1950～60年代の決定論的な社会史を否定した。長期的な原因の否定や、情況性の重視、政治における民衆の役割の否定によって、修正主義者は意識的に高次の政治ハイ・ポリティクスに焦点を当てた。修正主義のより不幸な遺産の一つは、政治史をエリート男性の行為へと明らかに狭めたことであった。

社会史家は、よく知られるように、社会としての社会ソサエティの歴史（the history of society qua society）を書こうとした。社会構造、社会関係、そして近世社会におけるあらゆる集団の社会的経験が、「新しい社会史」の中心に据えられた。社会史家が参照した研究の多くが、長期の通時的な発展の類型学のなかで実践されていた。これらすべてが、社会史家を近世イングランドの政治史から遠ざけた。社会構造史によって要求された、長期的傾向を明らかにし、説明することをめざした数量的で質的な分析——人口動向、経済指標、犯罪「率」など——への傾倒から、多くの社会史家は、より希薄でナラティブを軸とした政治史への回帰を余計なものとしなした。

しかし、「新しい社会史」は、社会的なものと政治的なものとの関係についての初期の決定論的な解釈を放棄した（この点の潜在的な、まだ十分に実現されていない利点は、いまだに高次の政治史の王道にある目印で決められている、時代区分への挑戦である⁵²）。1989年のケンブリッジ大学歴史学

⁵⁰ 例えば、以下の論集に収められたライトソンの門下生による論考を参照。Hindle, Shepard, and Walter, eds., *Re-making English Society*.

⁵¹ Keith Wrightson, 'The Enclosure of English Social History,' in Wilson, ed., *Rethinking Social History*, 59-77 (a modified and expanded version of an article originally published in *Rural History* 1, no.1 [1990]: 73-81).

欽定講座教授就任講演において、パトリック・コリンソンは「新しい政治史」——「政治を取り戻し」て統合した社会史——を求めた⁵³。「新しい社会史」の展開の核には、長期的パターンを明らかにし、説明するという関心があった。また「下からの歴史」への注目は、ほとんどの政治史が従来、政治における行為主体性から排除してきた人びとの信仰と行動を明らかにすることに社会史家の目を向けさせた⁵⁴。

社会史家が参照した社会科学の分野での諸研究に現れる限りにおいて、政治史は国家形成のモデルと構造を取り扱っていた。これらの研究について驚異的だったのは、それらが国家について述べる時には、国家はしばしば抽象的な存在であり、小農社会と共同体への圧力の外的な発生源とみなされたこと、また、その詳細な形態と歴史は、研究の主要な対象の外に置かれたことである。しかしながら、この国家への着目は、のちの近世の政治史と社会史の関係性の回復において重要な意味をもつようになった。

『イングランド社会史』は、変化のさらなる指標として、統治プロセスの発達をとくに重視した。政治は、この段階の社会史を形づくる影響力と完璧にペースを合わせて登場した。しかし、今やそれは「より積極的な国家の要求」と、中流層を組み入れて教会と社会の改革を促進するという文脈においてであった。つまりこれは、社会史が近世社会の社会的ダイナミクスのなかに政治を見出したことを示している。こうした社会についての変化の解釈が、その他の点において、この時代の政治史にどのような重要性をもったかについて、ライトソンはあえて議論することはなかった。これは、もしかすると好機を逸したといえるのかもしれない。にもかかわらず、国家形成と中流層による統治の相互関係に関するライトソンの理解は、「政治の新しい社会史」が構築される基礎の一つとなった。

すべての社会史家は、彼らが研究で用いる史料の生成と、彼らの研究課題の核にある社会構造、社会関係、そして社会経験の復元との双方のプロセスにおける権力の営みに敏感でなければならなかった（あるいは、そうあるべきである）。エリートエリートの眼をつうじた「社会史」ではなく、あらゆる社会集団あらゆる社会集団の歴史を書こうとする試みは、活字史料ではなく、アーカイヴ史料に焦点をおくことを要求した。なぜなら、近世イングランドの男性の相当の割合が、彼らが非識字で、より貧しく、権力をもたないことから、歴史史料の生成（および保管）へのアクセスを否定されていたからである。これは近世の女性に対してさらに強烈に適用された条件だった。「新しい社会史」は、時代による変化に関する議論を創出するために連続した史料の体系的分析を重視したが、それゆえにアーカイヴ史料の来歴と構成の調査は重要な課題となった。そこには、当然ながら史料を生み出すのに役割を果たし、史料に書き込まれた権力への関心があった⁵⁵。

⁵² 中世と近世の境に関する異なる時代区分を提示している社会史の研究の例としては、Andy Wood, *The 1549 Rebellions and the Making of Early Modern England* (Cambridge, 2007); David Rollison, *A Commonwealth of the People: Popular Politics and England's Long Social Revolution, 1066-1649* (Cambridge, 2010).

⁵³ Patrick Collinson, *De Republica Anglorum: Or, History with the Politics Put Back* (Cambridge, 1990), 14.

⁵⁴ たとえば、以下の論考を参照。John Walter, *Crowds and Popular Politics in Early Modern England* (Manchester, 2006).

「下からの社会史」と社会的に従属する集団の経験を取り戻すという任務から、社会史家は法廷史料が提供しうる証拠にももちろん関心をもった。しかし、同時代人が法廷訴訟を利用するか（あるいは避けるか）、また、史料に現れるか否かを決めた地域的・社会的・政治的關係性を明らかにするにあたって、社会史家は、世俗法廷史料と教会法廷史料の双方が国家と教会の課題を反映しており、それは時代によって変わるかもしれない、さらにそれが、地域社会がどのように法廷を利用し、また何が記録されたか（あるいはされなかったか）に重大な結果をもたらしたかもしれないことも認識せねばならなかった。このように、国家と教会が何をしたかは〔社会史家にとって〕問題だったのだ。

社会史家は地方についての、また、地方における歴史の研究者であり、ウェストミンスターやホワイトホールの歴史家ではない。しばしば大量の一次史料の骨の折れる調査に集中し、複数の史料間のレコード・リンケージに専心し、社会学の共同体研究学派と人類学の村（あるいは町）への注目に影響を受けて、社会史は限定された空間のなかで研究された。社会史家が考察したのは、州か地域共同体のなかであり、ときにはローカルな都市共同体や農村共同体自体が彼らの研究対象であった⁵⁶。しかし、間もなくはっきりしたのは——法廷史料の利用に明らかに関連した点であるが——地域社会に対する国家の足跡の伸長の重大さの認識である。このようにして、地域社会の出来事に国家は単なる出来事の受動的な記録者としてではなく、出来事の積極的な参加者として密接に結びつけられていた。

社会史家（と文化史家）は、当然ながら近世の社会規範の復元に関心を抱いていた。実際、犯罪と逸脱行為は、さもなければ表明されない社会規範の対立や遂行の瞬間に提供された証拠を求めて研究された。社会史家は、「普通の」男女の生活を取り戻すという彼らの任務から地方へと導かれ、教会および国家の法廷史料に到達した。しかし、そこで彼らは、争いのなかでイデオロギーが役割を果たしていることを発見した。これらの争いは、法の保護を求めた人びとによって法廷に持ち込まれたが、それはより広い経済的・社会的緊張をきっかけに、彼らの直接的な利害を当時の国家と教会のキャンペーンや関心事と結びつける機会となっていた。教会と国家におけるより広い争いは、地域社会の争いによって横領され、同時に促進されたのだ。そして、これらの争いのなかで明らかにされた男女の日常的な生きられた経験における言語実践は、その内で「ナショナルな」政治が遂行される共通の言語を再生産し、また、映し出していた。社会史家は、したがって、様々な〔小文字の〕「内戦 wars」の歴史家となった——たとえ17世紀なかばの〔大文字の〕「内戦 Wars」の歴史家ではなかったとしても⁵⁷。

「新しい政治史」の第二の重要な帰結は、「新しい社会史」が「急激に脱制度化された政治の理

⁵⁵ たとえば、社会史の初期の古典である、エマニュエル・ル・ロワ・ラデュリの『モンタイユ』に対する人類学者による批判的な書評としては、Renato Rosaldo, 'From the Door of His Tent: The Fieldworker and the Inquisitor', in Clifford and Marcus, ed., *Writing Culture*, 77-97.

⁵⁶ Macfarlane with Harrison and Jardine, *Reconstructing Historical Communities*; Macfarlane, 'History, Anthropology and the Study of Communities', *Social History* 2 (1977): 631-652; Levine and Wrightson, *Poverty and Piety*.

⁵⁷ しかし、以下も参照。Bernard Capp, *England's Culture Wars: Puritan Reformation and Its Enemies in the Interregnum, 1649-1660* (Oxford, 2013).

解」によって特徴づけられたことだ⁵⁸。政治は今や権力が行使されたところではどこにでも見出された。他方で、権力の性質も同様に急激に拡張され、無数の社会的・文化的形態におけるその生成と対立を含むようになった。同時に、「新しい社会史」には、支配され、従属する集団の「下からの歴史」を書くという政治的任務があった。これは、マルクス主義者と「新しい社会史」の関係と、1960～70年代の「民主化」という社会的・政治的コンテクストとの関係の双方を反映している。大望は、これらの集団の政治的アイデンティティと行為主体性を回復することにあつた——E・P・トムソンの有名な言葉に、「後代の途方もない見下し」から彼らを救い出すとあるように⁵⁹。ここでの政治は、小農と職人の（男と女の）共同体の領分であり、「新しい社会史」の最も想像的な実践のいくつかとして、ストライキや大衆による抵抗運動と同じくらいに、カーニバル的、劇場的な民衆文化のエピソードが発掘された。

これらの変化の結果は何だったのか？社会史が政治的变化の説明を提供するという、全体論的な主張は弱まったのに対して、政治と社会の相関性が近世国家の形成を理解する要とみなされるようになった。これは、社会的差異化が地域社会における国家の存在の伸長の原因であり、結果であるとするライトソンの考察のうえに築かれている⁶⁰。とりわけスティーヴ・ヒンドルとマイケル・ブラディックの仕事に関連して、近世イングランドにおける国家形成の近年の議論は、拡張された「政治」の定義を前提とし、理論的には「除外された」人びとの政治参加を認識すると同時に、「自らの統治において支配される者がもった役割の範囲」を測定した⁶¹。その結果生じた、コリンソンが提唱した「政治の社会的な深み〔を探究する〕新しい政治史」と「権力の社会的分配と利用」という社会史の伝統的な焦点の合流は、強調点の相違はあれ、両者の関心を融合させた⁶²。この国家形成の社会的ダイナミクスの強調は、ライトソンがかつて望んだように、社会史が「全体の理解を変貌させる」強力な事例となるのかもしれない。

関連した展開のなかで、社会対立と民衆政治は、より広い権力関係の交渉として再評価されるようになった。これは、従属させられた集団の行為主体性を取り戻すという継続した関心を反映している。ここで最も強い影響力をもった学際的交流は、社会人類学者／政治学者ジェイムズ・C・スコッ

⁵⁸ Eley, *A Crooked Line*, 58.

⁵⁹ E. P. Thompson, *The Making of the English Working Class* (1963), 12 [エドワード・P・トムソン、市橋秀夫／芳賀健一訳『イングランド労働者階級の形成』青弓社、2003年、15頁]。

⁶⁰ より近年の研究は、この過程はライトソンが示唆したよりも時系列的により古いルーツをもっていたことを示した。John Watts, 'Public or Plebs: The Changing Meaning of 'the Commons', 1381-1549', in Huw Pryce, J. Watts and R. R. Davies, eds., *Power and Identity in the Middle Ages: Essays in Memory of Rees Davies* (Oxford, 2007), 242-260.

⁶¹ Steve Hindle, *The State and Social Change in Early Modern England, c. 1550-1640* (Basingstoke, 2000); Michael J. Braddick, *State Formation in Early Modern England, c. 1550-1700* (Cambridge, 2000), Tim Harris, ed., *The Politics of the Excluded, c. 1500-1850* (Basingstoke, 2001); Ethan H. Shagan, *Popular Politics and the English Reformation* (Cambridge, 2003), 19.

⁶² 歴史学研究所による「歴史をつくる」シリーズのなかで実施された、2008年のジョン・モリルのインタビュー。Institute of Historical Research 'Making History' series: www.history.ac.uk/makinghistory/resources/interviews/Morrill_John.html [accessed 13 December 2011].

トの「公的トランスクリプト」概念である。「公的トランスクリプト」は、服従と権威の条件を確定するが、しかしこれはベールで覆われた抵抗の「隠れたトランスクリプト」に沿って存在する⁶³。スコットのテンプレートはその最も洗練された再加工のなかで、複数のヒエラルキーの交差によって構成される「近世の権力グリッド」という形での「権力関係の多面性のより繊細なモデル」の構築に影響を与え、その結果、初期の「新しい社会史」の大部分を組み立てたエリートと民衆、支配者と被支配者といった単純すぎる二分法に異議を唱えた⁶⁴。これらのトランスクリプトは、財産と権力を所有する者に義務を課すことによって、君主や聖職者、治安判事たちが正当な権威として権力を行使することに同意を取り付けることをめざしていた。国家の礼拝における典礼や特別礼拝において、説教壇や市場の十字架のもとで読み上げられる公示された布告において、また、広く流通し、安価で購入できるようになる印刷物のなかで次第に繰り返される形で広められたこれらのトランスクリプトは、逆に地域や州社会に対しては、敬虔な君主と共和国^{コモンウェルス}という強力に変幻自在な言語のなかでの社会的正当化〔の機会〕を提供した。このようにして、〔政治への〕参加は権威の経験だけでなく、政治的教育の可能性も提供した。この政治化のポテンシャルは、群衆の政治——嘆願や中傷文、暴動と反乱——に関する新しい研究によって明らかにされている⁶⁵。民衆の抗議を禁ずる服従の文化の枠内で行動する必要から、群衆は教会と国家の公的トランスクリプトに由来する言語内で彼らの抗議と不満を正当化し、政治における行為主体性を主張した。生存維持の政治 (politics of subsistence) におけるよき君主と為政者の義務を強調したトランスクリプトは、批判的な民衆の政治文化への道を開いた。そして、そこで用いられた言説の形態と彼らが用いた言語は、宗教と法廷の政治への批判や批評へとあふれ出していった⁶⁶。

より近年では文化論的転回が、社会的に非均質な近世の政治文化への関心の急成長に対する、社会史家の貢献をうながしている。これは、またしても社会理論の変化を反映している⁶⁷。Early English Books Online (初期英語書籍集成データベース) のデジタル化された頁の数々に、近世の印刷文化から明らかになる表象の解釈が共有されつつある。文化的形式が単に権力を称揚しているのではなく、

⁶³ James C. Scott, *Weapons of the Weak: Everyday Forms of Peasant Resistance* (New Haven, 1985); idem, *Domination and the Arts of Resistance: Hidden Transcripts* (New Haven, 1990).

⁶⁴ Michael J. Braddick and John Walter, 'Introduction. Grids of Power: Order, Hierarchy and Subordination in Early Modern Society', in John Walter and Michael J. Braddick, eds., *Negotiating Power in Early Modern Society: Order, Hierarchy and Subordination in Britain and Ireland* (Cambridge, 2001).

⁶⁵ John Walter, 'Reconstructing Popular Political Culture in Early Modern England', in Walter, *Crowds and Popular Politics*, 14-26; David Zaret, *Origins of Democratic Culture: Printing, Petitions, and the Public Sphere in Early-Modern England* (Princeton, N.J., 2000); Adam Fox, 'Ballads, Libels and Popular Ridicule in Jacobean England', *P&P* 145 (1994): 47-83; Alastair Bellany, 'Libel', in Joad Raymond, ed., *Cheap Print in Britain and Ireland to 1660*; Joad Raymond, ed., *The Oxford History of Popular Print Culture* 1 (Oxford, 2011), 141-163.

⁶⁶ John Walter, 'Public Transcripts, Popular Agency and the Politics of Subsistence in Early Modern England', in Braddick and Walter, *Negotiating Power in Early Modern Society*, 123-148.

⁶⁷ Raphael Samuel, 'Reading the Signs', *History Workshop Journal* 32 (1991), 88-109; ibid., 'Reading the Signs: II. Fact-Grubbers and Mind-Readers', *History Workshop Journal* 33 (1992), 220-251.

権力の形式を構成していることをみて、社会史家と文化史家は他の社会的・文化的実践が——宮廷儀礼から、村のシャリバリの儀礼まで——政治的な思考と実践を条件づけ、制限した規範を声に出し、視覚化するのになにかに貢献するかを示すようになった。この一群の研究は、とりわけ新しい文芸批評など他分野からの貢献を受けていた。そして、共通の言語と意味に重点を置き、これらの交流の社会的な深みを探求するものだった。

4. 「新しい社会史」と文化論的転回

1980～90年代までに、「新しい社会史」の概念的、方法論的基礎は次第に批判にさらされるようになった。人類学的転回の強調点は文化人類学へとシフトした。経験の再構築に対して表象分析を優位におくポスト構造主義や、構造に対して行為主体性を解釈上、優越させる「新しい文化史」による挑戦は、社会構造変化モデルのなかで暗示されていた全体論的主張とマスター・ナラティブに対する猛攻撃となった。社会的現実を構成するのではなく、反映するものとして文化をとらえる「土台—上部構造」の二分論を否定し、今や「因果法則的説明による推論よりもむしろ…意味の解釈」が「文化史の中心的課題」であるとされた⁶⁸。そうして、文化史は「ハード・エッジ」な社会科学との対話を放棄し、文化人類学と言語論に大きく依拠するようになった。

同分野のその後の発展に最も大きな影響を与え、また論争的であった変化はほぼ間違いなく、分析カテゴリとしてのジェンダーの登場に関連するものだろう。これ自体が「新しい文化史」の優先事項の一つでもあった。1970年代におけるフェミニズムの第二波と連動した女性史の復活は、家父長制と切り離して階級を分析することの不適切さを明確にただけでなく、男女間の相互の人間関係を「政治的なもの」のうちに含むように、定義の権限を大幅に拡張した⁶⁹。この仕事の大部分は、家父長的な抑圧のコンテクストにおける女性の行為主体性へのより広い関心の影響を受けていた。この関心は、支配と抵抗のプロセスに関するより全般的な分析を拡大し、社会対立の傾向と権力の社会的分配に関してより豊かな図を描くことを可能にした。約20年後に、男らしさの歴史がついに勢いを獲得し始め、(落とし穴がないとはいえない一方で)家父長制の実像の考察を洗練化させるポテンシャルをもち始めている。単一的な抑圧の形態としてではなく、男女間の差異と同様に各性の内部の(ジェンダー化された)差異の上に構築された、権力の多面的なマトリクスとして家父長制をとらえる、というようにして⁷⁰。この領域の研究は、社会変化を推進し、それに随伴した差異化と同化のプロセス

⁶⁸ Lynn Hunt, 'Introduction: History, Culture, and Text', in Lynn Hunt, ed., *The New Cultural History* (Berkeley, 1989), 1-22. 引用は p.12 より (リン・ハント編、筒井清忠訳『文化の新しい歴史学』岩波書店、1993年/2015年、14頁)。

⁶⁹ この展開の理論的基礎については、以下を参照。Sylvia Walby, *Theorizing Patriarchy* (Oxford, 1990). 1970年代のフェミニスト理論に関連した転換期を反映した論説としては、Sally Alexander and Anna Davin, 'Feminist History', *History Workshop Journal* 1 (1976), 4-6.

⁷⁰ この展開の要約については、Alexandra Shepard, 'Manhood, Patriarchy, and Gender in Early Modern History', in Amy E. Leonard and Karen L. Nelson, eds., *Masculinities, Childhood, Violence: Attending to Early Modern Women - and Men* (Newark NJ, 2011), 77-95.

に寄せる強い社会史の関心とも明らかに調和し、ジェンダーと階級の二重の作用の分析への新たな機会を提供している⁷¹。

ジェンダー分析の発展の第二の、ほぼ間違いなくより異論の多い帰結は、ジェンダー・アイデンティティの言説的な生成と、それによりジェンダーの言説が権力を表した点を強調するポスト構造主義である⁷²。一方で、この点は過去のセクシュアリティを分析するのに不可欠であると認められ、また、「公」と「私」、政治と文化、家族と国家といった概念的境界のいくつかを有益にも解消した——近世史においては、とりわけ身体、世帯、国家のあいだの比喩的・換喩的な省略の考察を通じて。しかし他方では、言説プロセスを社会的経験から切り離し、ジェンダーにいかなる存在論的地位も与えないという誤りをも生み出した⁷³。この問題への一つの応答は、主観性の精神的・肉体的な次元に再び取り組むことである⁷⁴。別の人物は、歴史家は「分析の文化的・社会的形態を切り離すことを拒否し、いかに社会的・文化的形態が互いにそれぞれを構成しているのかを理解すべきである」と主張している⁷⁵。ジェンダーは、もはや単なる言説上の構築物ではなく、変化に対する連続のナラティブを提供し、時代による変化の描写ではなく、変化の説明のなかに内在するようになった。ジェンダー史はこのようにして時代区分のより広い議論へと再び参加する。

近年では、文化論的転回を受けた社会史の命運についての考察が盛んである。しかし、この回顧的な衝動は、近世史家が通ってきた道筋を大きく見逃している⁷⁶。文化論的転回が「社会史と何か違うのか、社会史に対する危険ともなりえるのではないか、あるいは、むしろ社会史のなかの革新ではないか」についての全般的な意見の相違はいまだ残されている⁷⁷。文化論的転回による「危険」のレベルは、広く誇張されすぎているように感じられるとはいえ、この三つのすべてである、ともいえるかもしれない。なぜなら、とりわけ社会史は多様な分野と学術環境にまたがり、異なるやり方で展開さ

⁷¹ たとえば以下も参照。Susan Amussen, “‘The Part of a Christian Man’: The Cultural Politics of Manhood in Early Modern England”, in Susan Amussen and Mark Kishlansky, eds., *Political Culture and Cultural Politics in Early Modern England* (Manchester, 1995); Alexandra Shepard, *Meanings of Manhood in Early Modern England* (Oxford, 2003).

⁷² 古典的な意見としては、Joan Scott, ‘Gender: A Useful Category of Analysis’, *American Historical Review* 91 (1986), 1053-1075. これに対する反応は、Joan Hoff, ‘Gender as a Postmodern Category of Paralysis’, *Women’s History Review* 3 (1994), 149-168. 近世史に関連した、より慎重な批判の試みについては、Jeanne Boydston, ‘Gender as a Question of Historical Analysis’, *Gender and History* 20 (2008), 558-583.

⁷³ Joan Scott, *Gender and the Politics of History* (New York, 1988) [ジョーン・W・スコット、荻野美穂訳『ジェンダーと歴史学』平凡社、増補新版、2004年]；Moirá Gatens, *Imaginary Bodies: Ethics, Power and Corporeality* (London and New York, 1996).

⁷⁴ 「身体的なもの…を統合する」ための先駆的な研究としては、Lyndal Roper, *Oedipus and the Devil: Witchcraft, Sexuality and Religion in Early Modern Europe* (London and New York, 1994), 18.

⁷⁵ Laura Lee Downs, *Writing Gender History* (London and New York, 2004), 101.

⁷⁶ たとえば、Victoria E. Bonnell and Lynn Hunt, eds., *Beyond the Cultural Turn: New Directions in the Study of Society and Culture* (Berkeley, 1999); 『社会史研究』特別号 *Journal of Social History* 37 (2003); Peter Mandler, ‘The Problem with Cultural History’, *Cultural and Social History* 1 (2004), 94-117; Eley, *A Crooked Line*; エレイの著作のフォーラムは *American Historical Review* 113 (2008), 391-437; Patrick Joyce, ‘What is the Social in Social History?’, *P&P* 206 (2010), 212-248. 近世史のより近年のサーヴェイとしては Gartine Walker, ed., *Writing Early Modern History* (2005).

⁷⁷ Peter N. Stearns, ‘Social History Present and Future’, *Journal of Social History* 37 (2003), 9.

れた様々なアプローチを含んでいるからだ。近世社会史の文化史との関係は、様々な意味で極めて生産的である——たとえ解消しない意見の相違と競合する優先事項が、将来の史学史的軌跡について疑問を投げかけ続けるとしても。極めて一般的な意味で、文化論的転回の最良部は、学際的・理論的対話の新しい形を促進した。それによって、テキスト分析はずっと洗練され、より広い基盤をもつ権力関係（言説のなかで構築されたものとはいえ）に新たな関心が寄せられた。そして、「社会的なもの」と同様に「文化的なもの」が、構築する力をもつ可能性を主張し、前者を優先して後者を単に放棄するのではなく、二者のあいだのダイナミックな関係性を認めることから積極的な発展が生まれた。

最近の考察のなかで現れる文化史への批判は、長期的視野や時代区分の取り組みの欠如、物質的なパラメータの無視、周縁部への不相応な注目、マクロ社会と変化の説明を犠牲にしたマイクロヒストリーの優先といった点に集中している⁷⁸。〔文化史の掲げる〕「失われた大義」を〔社会史を支配した〕「失われた因果法則」と引き換えるのは、明らかに不十分な取引である。しかし、物質的な不平等についての研究と言語表象の研究は両立しないとは限らない。たとえば、教区における「従属の政治学と意味」——そこでは、経済的・政治的变化に文化的権威を付与する「再描写のプロセス」をつうじて、社会関係が「再び表明」された——を考察したライトソン自身の研究が、文化論的転回がいかにして、「新しい社会史」の社会関係と社会的アイデンティティに対する伝統的な関心を育て、拡張させると同時に、意味づけに沿った通時的・共時的な経験の探究への注目を保ち続けられるのかを示している⁷⁹。

⁷⁸ Jürgen Kocka, 'Losses, Gains and Opportunities: Social History Today', *Journal of Social History* 37 (2003), 21-29; Paula S. Fass, 'Cultural History/Social History: Some Reflections on a Continuing Dialogue', *Journal of Social History* 37 (2003), 39-46.

⁷⁹ Keith Wrightson, 'The Politics of the Parish in Early Modern England', in Paul Griffiths, Adam Fox and Steve Hindle, eds., *The Experience of Authority in Early Modern England* (Basingstoke, 1996), 10-46.